



## 作家と紙

# 桐野夏生

一枚の白い紙を掲げた人々の写真を見て、なぜか心を打たれた。

中国のゼロコロナ政策に抗議する人々の写真だった。A4サイズだろうか。まだ何も書き入れられていない白い紙は、個人が自由であることの象徴でもあるのだろう。そして、紙は我々作家の命でもある。そんな大袈裟な言葉が浮かんだ。

ジャカルタに行く仕事があつて、三年ぶりに海外旅行をした。入国前に、現地のワクチン接種証明のアプリをインストールして認証してもらわなければならないという。認証はされたものの、不安なので英字で書かれたワクチン接種証明書も持参した。

ところが、インドネシアは驚くべきモバイル王国となっていた。紙の証明書を見せることなど一度もなかった。ホテル、ショッピングモール、スーパー、あらゆる建物に入るのに、必ずそのアプリによる認証が必要となるので、誰もがスマホでQRコードを読み取って入館する。

固定電話のインフラより、モバイルインフラの方が安いので、アジアの国では結構しっかりモバイルインフラが構築されているのだとか。

そんなわけで、スマホを握り締めての旅行となった。いずれ日本も、決済も認証も何もかもがスマホひとつで済む社会になる、と思わせる出来事だった。

しかし、便利な反面、自分が何か大きなものに繋がれて、常に認証を乞わなければならぬ不自由さを感じた。

私の仕事はモバイルとは無縁で、紙は必需品である。もちろん、電子書籍化も進んでいるし、ゲラはPDF化され、私たち作家もほとんどがメールで入稿する。だけど、その前段階の原稿を作る時に紙は必要となる。

原稿を書くのはパソコンでも、推敲や全体のバランス、今後の展開を考えるには、プリントアウトして紙で見ないとできないからだ。

間違いや違和感があれば、書き直してプリントアウト、という作業を何度も繰

り返す。PDFで来たゲラも、いったんプリントアウトしないと校正できないし、資料も同じ。すべて印字して、クリアファイルで保存する。

従って、私のデスク周りは紙だらけとなる。すべて、何の変哲もない同じ白い紙だ。A4のホワイトコピー用紙。Amazonで箱買いして、半年は保つ。

そして、それらはすべて反古紙となる。昔の作家ならば、名人りの原稿用紙の反古を棄てたりはしないだろうけれど、赤が入った大量のホワイトコピー用紙は仕方なく棄てられる運命だ。勿体ないが、紙の役目を十分に果たしている、とも思うのである。

いずれ本や雑誌はほとんどが電子出版物となるだろう。携帯で小説を書く作家もいるのだから、紙を愛する私は時代遅れも甚だしいと言われるに違いない。それでも、私の棺には一枚の白い紙を入れてほしいと願っている。

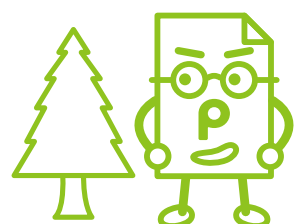


きりのなつお●作家。1998年『OUT』日本推理作家協会賞、99年『柔らかな頬』直木賞、2003年『グロテスク』泉鏡花文学賞、04年『残虐記』柴田錬三郎賞、05年『魂萌え!』婦人公論文芸賞、08年『東京島』谷崎潤一郎賞、09年『女神記』紫式部文学賞、10年『ナニカアル』島清恋愛文学賞と11年の読売文学賞など受賞多数。最新作は『燕は戻ってこない』(集英社刊)。現・日本ペンクラブ会長。

## ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

### 紙づくりは、「森想い」なんです。

まず植えて→育てて→伐ったら→また植える。植林で森をうまく循環させながら、紙をつくっているんだって。これらの森のほとんどは、もともと使われていない牧草地や荒地だった場所。製紙会社は、自然の森に迷惑をかけないように、森をつくりながら紙をつくっているんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>

今回は2023年3月30日号です。